

第 15 回 『SCIX スポーツ・インテリジェンス講座』 (オンライン)

——スポーツの価値を再考する——

【第 2 回】

テーマ:「学生スポーツが目指すべきもの」とは何か

講師: 鳥内 秀彰氏 (関西学院大学アメリカンフットボール部前監督)

元木 由記雄氏 (京都産業大学ラグビー部 GM ラグビー元日本代表)

司会: 平尾剛氏 (神戸親和女子大学教授 ラグビー元日本代表)

日時: 2021 年 10 月 2 日 (土) 19:00~20:30

会場: Zoom ウェビナー



「スポーツの価値を再考する」をメインテーマとする『第 15 回 SCIX スポーツ・インテリジェンス講座』。今回は、スポーツ文化評論家の玉木正之氏を講師にお迎えし、「『東京 2020 オリンピック・パラリンピック』の意味を、もう一度考える」をテーマにお送りしました。今期 2 回目となる今回も、前

回同様、神戸親和女子大学教授の平尾剛氏に司会を務めていただき、Zoom ウェビナーを使用し、オンラインでの開催となりました。

今回のテーマは『「学生スポーツが目指すべきもの」とは何か』。学生スポーツというと、日本では高校も大学も「部活」という言葉で表現されていますが、今回は「大学スポーツ」の現場での指導経験を持つ、お二人の講師をお招きし、「大学スポーツ」にスポットを当て論じ合っていきます。

今回、平尾氏のナビゲートにより「学生スポーツ」について議論していただいた講師は、昨年この講座にご出演いただき、本講座やフットボールコーチングセミナーでおなじみの、関西学院大学アメリカンフットボール部前監督の鳥内秀晃氏と、京都産業大学ラグビー部 GM で、現役時代はラグビー日本代表として大活躍された元木由記雄氏。鳥内氏には平尾氏同様、神戸国際会館セミナーハウスにお越しいただき、元木氏には京都からオンラインでご参加いただきました。

元木氏と平尾氏の関係に少し触れておきますと、神戸製鋼では 1999 年から 2006 年まで共にプレーし、日本代表では SCIX 初代理事長の平尾誠二氏が代表監督を務めた「平尾 JAPAN」で、1999 年にウェールズで開催された「第 4 回ラグビーワールドカップ」でも一緒だったお二人。大先輩との共演に緊張していると平尾氏。

それもそのはず、元木氏と言えば、日本代表不動の「背番号 12」として、20 年間以上に渡り

代表チームを牽引。ラグビーワールドカップには1991年の第2回オーストラリア大会から、1995年の第3回南アフリカ大会、1999年の第4回オーストラリア大会、2003年の第5回イングランド大会まで4大会連続出場という、まさに「ラグビー界のレジェンド」「鉄人」。昨年からは司会進行を務めていただいている平尾



氏であっても、元木氏を前に緊張するというのは当然のことかもしれません。

現在は京都産業大学ラグビー部でバックコーチ、ヘッドコーチを経て、昨年からはGMとして、「大学スポーツ」の運営に当たられている元木氏。一方、関西学院大学アメリカンフットボール部監督として率いた28シーズンで、甲子園ボウル12度もの優勝を果たし、学生アメリカンフットボールを牽引してきた名将・鳥内氏。「学生スポーツ」の在り方を含めた、鳥内氏流、元木氏流の「学生（人）の育て方」「コーチング論」をたっぷり伺いました。

まずは開幕したばかりの関西大学ラグビーについて。昨年度大学選手権初制覇の天理大学が初戦で近畿大学に敗れるという、いきなりの大番狂わせがあり、波乱の予感と元木氏は言います。自身の京都産業大学については、「コロナの関係で初戦が延期になったこともあり、チームの活動が止まっていたので、来週の立命館大学戦に照準を合わせて練習している」とのこと。同じく関西アメリカンフットボール（秋季）リーグ戦も、コロナ禍で開幕が1ヶ月延期となり、本講座開催日の10月2日（土）からスタート。関西学院大学は翌日の3日（日）、同志社大学と対戦予定と鳥内氏（48-7で関西学院大学の勝利）。「コロナのせいで練習内容も人数も限られて、なかなか思うような練習ができていない。時間をずらして人数に配慮しながらやっている」「人数制限や時間制限は学校の指示に従っている。最終学年の4年生が試合をでけへんっていうことだけは避けたいので、ケアは万全に対策している。マスクをしない選手に指導したり、ほとんど生活指導みたいになっている（苦笑）」とコロナ禍での活動の難しさを吐露するお二人。

続いて、平尾氏から、学生スポーツの最大の特徴とも言える「毎年メンバーが変わる」という点について、どういう考えをお持ちか、また、チーム作りのためにどういった工夫がなされているのか？という問いが投げかけられました。「最上級生の結束、力がチームに反映される。まとまりのある代、ない代に左右されることはあるけど、むしろ年代で変わっていくのが面白い。その年の色を出していくことが大切」と元木氏。また、「チーム文化を作っていくことが一番大事だと思っている。関東では、勝つ文化、負けられない文化がチームとして確立されている。チームとしての揺るぎない方向性が作れば、カラーが変わっても揺るぎないチームが作れるのではないかと考えている」と続けます。

ここで同志社大学ラグビー部として関西リーグ出身の平尾氏が、関東リーグの明治大学ラグビー部出身であり、日本代表キャップ数79と歴代3位（1位 大野均氏（東芝）98、2位 小野澤宏



時氏(サントリー) 81) の記録を持つ元木氏のプロフィールを紹介した上で、関西のチームの指導者になった元木氏に、関西リーグと関東リーグのギャップについて尋ねました。「勝利に対する執着が違う。そういったところの差を埋めたいと思って、今やっているところ」と元木氏。

「関西学院大学アメリカンフットボール部では文化が出来上がっていると思いますが?」という平尾氏の言葉に、鳥内氏がこう答えます。「(関西学院大学アメリカンフットボール部は) 私の父親の世代から 33 年連続で勝っていた。それは何でか? って考えたら、『自分らの代でも勝ちたい!』っていう文化がある。でも文化だけではあかん。社会人になる前に人間性を鍛えてあげないといけない。クラブでそれを鍛える。学年が上がっていくにつれて、人に教えてあげられるようにならないといけない」。この鳥内氏のコメントを受け、著書「どんな男になんねん(ベースボール・マガジン社)」にも、鳥内氏自身の体験に基づいた為になる言葉がたくさん詰まっていると平尾氏。すると鳥内氏がチーム作りについて、こう続けます。「下級生でも意見が言えるし、その意見を取り入れる環境を作っている。アイデアを出しても受け入れられない、そうなるとうちも意見を言わなくなる。環境さえ作れば勝手に人は成長する。上下関係はある。上級生は下級生の面倒を見る。自分はこれがフツーやと思っている」。これを受けて、上下関係について元木氏はこうコメント「うちも上下関係はあんまりないですね。道具の出し入れも上級生がやったりしているし。選手たちが充実していると思えるなら何をやってもいいと思う。上下関係はあったほうがいい。ただの仲良しグループになるのは良くない。自分たちに厳しくできたり、人に対してきちんと物が言える関係性が大事」。その昔、大学の体育会スポーツクラブでは、4 年は神様、1 年は空気といったようなことが言われた時代があったと言いますが、行き過ぎた上下関係はチームをいい方向に導けないと三人が口を揃えます。「試合中、メンバーの年齢なんてバラバラ。そこで言いたいことが言えへんかったら勝たれへん。ゲームなんてでけへん」と鳥内氏。「ゲーム中は先輩を呼ぶのに、さん付けせんでいいって先輩が言ってくれた。それはありがたかったし、適切だと思った」と平尾氏も上下関係について、現役時代のエピソードを紹介。

さらに、ここで毎年チームが変わる大学スポーツのチーム作りについて「強さを保っていくためには新しいものを取り入れないといけない。仮に去年が強くても、去年と同じことをしては勝てない」と元木氏。これに鳥内氏も「去年のやり方がいいのか? それでいいゲームができるのか? それを考えさせないといけない。工夫しないと。4 年生と監督はどうやっていくのか話さない。監督だけが目立ってはいけない。監督はアドバイスを与えればいい」と持論を展開しました。

100名を超える部員が所属する関西学院アメリカンフットボール部。競技に関係なく大学スポーツの強豪チームには多数の部員が在籍する傾向があります。「部員が多い場合、レギュラーとそれ以外のメンバーへの指導について工夫していることは？」と平尾氏が尋ねます。元木氏曰く、基本的にレギュラーはモチベーションが高いが、それ以外の選手はモチベーションを維持するのが難しいので、そういう選手たちとは意識して会話をするようにしているのだとか。勝ち負けだけではなく、自分がどうチームに貢献できるのかを理解してもらうことが大事だと元木氏は言います。「『元気か？体調どうや？』とかほんまに簡単な一言。通りかかった時に声をかけるようにしている。選手って気にかけてほしいって思っていると思う。気にかけてもらえてないって感じるのが一番きついと思う。いつも見てくれていると思うとやる気が出ると思う」という元木氏の発言に、鳥内氏も「見てるで、チェックしてるよっていうね。無視されるのが一番きつい」と同調。

常時40～50人が試合に出るアメリカンフットボール。「そのメンバーのがレベルが全然違うとあかん。下級生の中にはユニフォームを着ただけで満足する人間も正直おる。でも、それでは困る。勝つか負けるか死ぬ気でやってもらわな何も残らへん。真剣にやるから残るもんがある。自分がどうやってチームに貢献できるか考えやって、いつも言うてる。チームとしては毎年優勝を狙ってるよと。じゃあ、個人ではどうやねん？と。練習から目の前のプレーを一つ一つ真剣にやれと。試合の時に力が発揮できないのは、練習の中でそういう緊張感を作って、その中でやってないからや。授業も含め、相当きついことを求めている。でも、そうでないと勝てない。それが学生スポーツやし、それが社会に出てから活かされる」と鳥内節が飛びます。この、鳥内氏の練習に対する考え方について、「全く同じ考え」と元木氏も激しく同意。

勝ち負けだけではないところにこだわるのが学生スポーツであり、アクティブラーニングだと



鳥内氏は著書でも述べていますが、では、スポーツでしか磨けないリーダーシップとは？ここからしばし、昨年の講座テーマにもリンクする「リーダーシップ」に話題が及びます。「リーダーシップは何が大事か？机に向かって勉強しているだけでは、決してリーダーシップは育めない」と鳥内氏。元木氏も「リーダーとしてチームを引っ張って行く力は、現場でないと学べない」と同調。

さらに、「リーダー教育はどういう風に行っているんですか？どうやって育てているんですか？」と元木氏が鳥内氏に質問するというシーンも見られました。これに「自分と会話すること」と返答した鳥内氏。

「自分と話すにあたって、テーマを事前に投じているので、それに対して準備をしておかないといけない。そういうやり取りを通して成長していく。キャプテンが選手の前で話すことってありますやん。言う事考えとけよ、と」と続けます。鳥内氏のコメントに「言葉の大切さってありますよね。言葉との向き合い方、きちんと自分の語り口を持つって大事ですよ」と平尾氏。

加えてリーダーシップを育てる上で、指導者のあり方、スタンスについて鳥内氏はこう言います。「教えすぎると絶対成長できない。コーチの理想がありすぎると、選手の個性を消してしまう。アメリカでも若いコーチはそういう傾向がある。自分の理想にはめてしまう。選手が自分で考えたアイデアを実践して、それがうまいことって、おもしろって感じたら、どんどんおもしろくなって、自分で考えてやるようになる。命令はしない。困ったら大人のコーチがいてるんやから聞いたらええやん。主役は学生。指導者は手伝うだけ。将棋の駒ちゃうねんから。おもしろって自分で思ったら、どんどんハマって自分で研究してやって行く。スポーツってなんでもそうや。スポーツでなくても、将棋の藤井くんもそうやと思う。日本は平均点の人間を作りすぎてる」。日本の学校教育では、「それは違う」「こう考えるべきだ」などという傾向があり、自発的な発言がしづらい雰囲気が強くて、主体性のない人間になってしまいがち。「どやねん？」「どう思うねん？」と質問を投げかける鳥内氏のスタンスがリーダーシップ育成には有効と言えるのではないのでしょうか。

「鳥内さんみたいな指導者に会えば、自分の言ったことがちゃんと認められて、自分の存在意義を感じられる。大人とか指導者によるところが大きい。最近特に指導者の存在の大きさを痛感している。なんか言うたら怒られるとか、尻込みしてしまうというのは良くない。学生がのびのびとできる環境を作ることが大学スポーツには大事。選手のことを主体的に考えるようにしている。選手より自分が成長することを常に念頭に置いている」と元木氏。「わからなかったらわからんって言わなあかん。わからんのに、わかったと返事をするのは日本人だけやと思う。ハイって言わへんかったら怒られるとかね。それは間違ってる。わからへんのは指導者のせい。わかるように教えてあげなあかん」と鳥内氏。

ただし、勘違いしてはいけないと鳥内氏は苦言を呈します。「楽しいだけじゃ勝たれへん。体を鍛えるために、めっちゃえげつないハードワークをしてる。でも、それは自分で選んでそうしてるんや」。さらに、大学スポーツにおいて勝ち負けよりも大事なこととして、こう続けます。「勝ち負けは保証できない。最終的に負けることもある。かといって、負けたからお前らのチームはあかんかったなんて思わない。それまでの過程でどうやってきたのが大事。やってきたことが財産。勝ち負けを目指すプロセスが大事。チームのゴールと個人のゴールがある訳で、負けたからといって全てが否定されるわけじゃない」。





元木氏もこう言います。「目標に向かって取り組むことが自分の財産になる。優勝や日本代表は形に残るが、それよりも自分の成長が大事。成長するために、厳しさの中に自分を発揮できる環境を作ってあげることが大事だと思っている。振り返ると、自分が明治大学で過ごした4年間は充実感しかない。もう一度やれと言われたらできないけど（笑）、寝ても覚めてもラグビーのことを考えていたし、充実感、幸福感しかない。それを選手たちにも経験してもらいたい。やるだけやっても結果が出ないことも多い。やりきった結果が出るのは10年後かもしれないし30年後かもしれない」。

大学スポーツは勝敗ではなく、目標に向かってどう行動するかが何より大切であり、学生がのびのびかつひたむきにできる環境をつくるのが指導者の使命というお二人の熱のこもったトークもいよいよ終盤に突入。

大学スポーツ界のトップコーチお二人による、これまでのお話をうかがった平尾氏が最後に日本のスポーツ指導者の待遇の悪さについて言及しました。「スポーツ指導はこれほど細やかにしないといけないし、これを通して学生が素晴らしい成長をすることができる。それをボランティアっていうのはおかしい。指導者の待遇を変えていかないと。スポーツ指導の役割は大きい、創意工夫や熱意、準備の時間が必要ということをもっとわかって欲しい」。

興味深いお話に、皆さん時間を忘れて聞き入ったことかと思いますが、早いもので会も残すところ20分を切り、ここからは受講者の皆様からの質問タイム。Zoom上に寄せられたメッセージを平尾氏が順に読み上げ、鳥内氏、元木氏のお二人からコメントを頂戴しました。いただいた質問、ご感想は下記の通り。

・関学のアメフト部が過去から変な上下関係が無かったようですが
何故 関学の他のスポーツ部はそうで無かったのでしょうか！？

・歴史・文化・指導者 過去からとはいつからだったのでしょうか！？

・「スポーツはアクティブラーニングの実践の場」というのが非常に納得感がありました。考え方としては「スポーツを一生懸命にやった結果として、人間成長が付随的についてくる」のか「人間成長を目的として、スポーツに取り組むのか」学生スポーツとしてはどちらがあるべき姿だと思われませんか？

・「スポーツは楽しむことが目的」という考え方がある一方で、「凄く辛い練習を経験して、後々振り返ったら辛い練習が自分を成長させてくれた」という辛い経験も大事という考え方もあると

思います。「スポーツを楽しむ」ということと「辛い練習で成長する」ということのバランスはどうお考えでしょうか。

・「化ける選手」に条件。ありますか？

また、期待されていたにもかかわらず、伸びない選手に共通点ありますか？

・神戸製鋼ラグビーと、関学アメフトのファンですが、お二人がこんなに面白く柔和な顔で話されること、初めて知り、とても良い時間でした。ありがとうございました。質問です。学生スポーツの特異性とは、一旦やり切れる時間が区切られていること、主体が教育である…という点、理解できました。それに対する社会人スポーツ、またプロスポーツの、それぞれの位置付け、違いをご教示ください。

・いかに自分で考えるか。できるだけ若い世代からそういう習慣をつけていくことが大事だということですね。先ほど、学校教育や学校体育の進め方へのご指摘がありましたが、小学生のスポーツへの取り組み方やコーチングへのアドバイスをぜひお願いいたします。

・学生スポーツが充実したものになるかどうかには、指導者によって左右されることがよくわかりました。

指導者のかたは、自分自身の人間性、技量等、どのようにしてレベルアップしておられるのでしょうか？

今回もたくさんのご質問、ご感想ありがとうございました。また今回もオンライン講座に、多数の皆さんにご参加いただき、ありがとうございました。楽しく有意義な時間を共有できたことと思います。大学スポーツのみならず、部活動やジュニア世代の育成、ビジネス現場や家庭でも活かす事のできるお話がうかがえたのではないのでしょうか？ぜひ、それぞれの立場で、いろんな場面で活かしていただけますと幸いです。

次回は10月16日（土）19:00より、元京都伏見工高ラグビー部監督で現在は京都市立京都奏和（そうわ）高校校長の高崎利明氏と、ラグビージャーナリストの村上晃一氏をお迎えし、『「ラグビーの特性から浮かび上がるスポーツの価値」とは』をテーマにオンラインにて開催させていただきます。次回もたくさんのご参加お待ちしております。

以上

（レポート 中野里美）

スポーツ振興くじ助成事業

